

# 児童養護施設の中高校生の アタッチメント・スタイルと特性不安の関連

牧 田 浩 一  
伊 藤 英 世

# 児童養護施設の中高校生のアタッチメント・スタイルと 特性不安の関連

牧田 浩一      伊藤 英世  
Koichi MAKITA      Haruyo ITO

## 目次

- I 問題と目的
- II 方法
- III 結果
- IV 考察

## [Abstract]

**The Relationship between Attachment Styles and Trait Anxiety among Junior and Senior High School Students Living in a Children's Home**

This study surveyed 98 junior and senior high school students living in a children's home and 251 junior high school students living at home. The objectives of this study were to clarify students' attachment styles and to investigate the relationship between trait anxiety and attachment styles. The study was conducted between August and November of 2014 using questionnaires. Results showed that the attachment styles of junior and senior high school students living in a children's home were 14.3% secure, 45.9% ambivalent, and 39.8% avoidant. In comparison, attachment styles of junior high school students living at home were 44.2% secure, 29.1% ambivalent, and 26.7% avoidant. Secure attachment style was less common amongst students living in a children's home, while ambivalent and avoidant attachment styles were more prevalent. Furthermore, with respect to the relationship between attachment styles and trait anxiety, students who lived in a children's home showed higher levels of trait anxiety than those who lived at home. The degree of trait anxiety was highest among students with an ambivalent attachment style, followed by those with avoidant and secure attachment styles. Given the above findings, this study considers the psychological traits of junior and senior high school students living in a children's home from the viewpoints of attachment styles and anxiety.

## I 問題と目的

厚生労働省(2015)によると児童養護施設の入所児童のうち、被虐待経験があるのは59.5%である。以前筆者が実施した調査では、7箇所の子童養護施設の心理療法対象児童のうち、何らかの被虐待歴を有する児童が84%であった(牧田, 2006)。被虐待児の診断名としてアタッチメント障害が多い(奥山ら, 2000)ことが指摘されているように、児童養護施設の入所児童は、乳幼児期からの母子関係、アタッチメントが不安定な養育環境

にあり、メンタルヘルスに課題を抱えている。

Bowlby(1969/1976)(1973/1977)(1980/1981)によると、本能的な安全感を求める欲求により、乳児と養育者の二者間に形成される絆をアタッチメントという。アタッチメントは、個人の内面に生涯にわたり存在し、心理的傾向やメンタルヘルスに影響を及ぼすとしている。また、Bowlby(1973/1977)は、不安は乳児がアタッチメント対象の不在を経験したときに生じるとし、分離と喪失に関連があると述べている。Brisch(2002/2008)は、アタッチメントは乳児と養育者の生後初

キーワード：アタッチメント・スタイル、特性不安、児童養護施設、中高校生、メンタルヘルス

Key words: Attachment Style, Trait Anxiety, Children's Homes, Junior and Senior High School Students, Mental Health

期のやり取りを通し形成され、その後においても変化可能であるが、その基本的な構造は比較的一貫していると述べている。

児童養護施設では、1999年より入所児童のうち被虐待児を対象に心理的ケアを目的とした心理療法が導入されている。子どもの心理療法に関して、Klein (1959, 2001/2005) は、「分析すべきは不安であり、もし不安の無意識的理由を見出すことが出来れば、不安を低減させることができる」と述べ、子どもの心理療法において不安はすべての症状の中心であると強調している。筆者らの児童養護施設での心理療法経験においても不安について考慮することが重要であると考えている。

アタッチメントと不安の関連として、大井 (2004), 西村 (2008), 泉・石田 (2012) などの先行研究がある。大井 (2004) は女子大学生を対象にした内的作業モデルと不安の関連を調べ、アンビバレント型が、安定型に比べて特性不安が高いとの結果を得ている。西村 (2008), 泉・石田 (2012) は、アタッチメント・スタイルと対人不安の関連について大学生を対象に調査している。しかし、筆者らが調べた限り児童養護施設の入所児童を対象にアタッチメント・スタイルと不安の関連について調べたものは見当たらなかった。したがって、児童養護施設の入所児童を対象とした調査が必要だと考える。

そこで、以下の仮説をもとに2つの研究目的を設定した。仮説①児童養護施設の入所中高校生 (以下, C群 (children's home) と略す) のアタッチメント・スタイルは、家庭で生活する群 (以下, H群 (home) と略す)

と比較し、安定型が少なく、アンビバレント型と回避型がともに多いただろう。仮説②H群と比較し、C群の特性不安は高いだろう。仮説③C群の特性不安は安定型と比較し、アンビバレント型と回避型の方が高いだろう。本研究では、C群のアタッチメント・スタイルを明らかにすること、アタッチメント・スタイルと特性不安の関連を調べることを目的とする。

## Ⅱ 方法

### 1. 調査対象

公立中学校での調査において児童養護施設での生活形態を弁別するために、児童養護施設での生活経験の有無を尋ね、「あり」と回答したものを分析から除いた。有効回答は、児童養護施設が98名 (男子46名, 女子52名)、公立中学校が251名 (男子115名, 女子136名) 合計349名 (平均年齢14.1歳, SD=1.5, range: 12-19) であった (表1)。

### 2. 調査方法

質問紙を用いて調査した。主に近隣の児童養護施設31箇所へ郵送により調査を依頼した。K県とN県内の6箇所の児童養護施設で暮らす中高校生から回答を得た。回収率は、16.1%であった。学校での調査は、校長会を通じて中学校並びに高等学校に調査を依頼した。M県内3校の公立中学校に通う1年生から3年生の生徒から協力を得られたが、高等学校からは回答を得ることが出来なかった。中学校の回収率は100%であった。質問紙の配布や回収は、児童養護施設は職員が、中学校は学

表1 対象者の内訳 (人)

生活形態	性別/年齢	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	合計
児童養護	男子	2	3	6	8	14	9	4	0	46
	女子	3	7	8	7	12	8	6	1	52
	合計	5	10	14	15	26	17	10	1	98
家庭	男子	15	33	47	20	0	0	0	0	115
	女子	31	37	41	27	0	0	0	0	136
	合計	46	70	88	47	0	0	0	0	251

級担任が行った。

### 3. 倫理的配慮（研究対象者・機関からインフォームドコンセントを得ること）

調査に当たり、児童養護施設長と学校長各1名に研究計画書と調査項目を確認してもらい了承を得た。回答に際し、調査用紙に調査の目的についての説明を記し、配布の時点で、アンケートへの回答は任意かつ無記名であり、調査に協力せずとも何ら不利益が生じないことを文書と口頭で伝えてもらった。各調査用紙は個別の封筒により回収されるよう配慮した。調査終了後、調査協力を依頼した児童養護施設と中学校には、集計データのフィードバックを行った。

### 4. 調査時期

2014年8月～同年11月にかけて実施した。

### 5. 調査内容

- 1) 基本的属性：性別，年齢（学年），児童養護施設での生活経験の有無（中学校での調査のみ）を尋ねた。
- 2) アタッチメント・スタイル尺度：アタッチメント・スタイルを測定するために、詫摩・戸田（1988）による内的作業モデル（アタッチメント・スタイル）尺度を用いた。本調査では、中高校生を対象とするため、一部の漢字を平仮名に修正した。アタッチメント・スタイルは、「非常によくあてはまる」「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の6件法で回答を求めた。戸田（1988）（1991）によると、この尺度はアタッチメント・スタイルを①secure（安定型；たいていの人は自分を好いてくれていると思い、すぐに知り合いが出来る。気楽に人に頼ったり、頼られたりすることができるという心的表象を相対的に強く持つ）、②avoidant（回避型；人と親しくなったり、親密な関係になることを嫌い、他人を全面的には信用でき

ないという心的表象を相対的に強く持つ）、③anxious/ambivalent（不安／アンビバレント型；自分を信頼できず、人から好かれているか自信がないという心的表象を相対的に強く持つ）の3つの下位尺度としている。

- 3) 不安測定尺度：不安を測定するために、曾我（1983）による日本版STAICのうち、「不安状態の経験に対する個人の反応傾向を反映するもので、比較的安定した個人の性格傾向を示すもの」である特性不安（trait-anxiety）を用いた。特性不安は、「はい」「ときどき」「いいえ」の3件法で回答を求めた。STAICは、Spielberger et al（1973）によって子ども不安を測定するために開発され、日本版STAICは曾我（1983）により内的整合性、因子構造の検討がなされ、十分な信頼性及び妥当性が確かめられている。

## Ⅲ 結果

児童養護施設の対象者を中学生と高校生に分けて、そのローデータを比較検討した。中学生と高校生では、分布に偏りは認められなかった。したがって、児童養護施設の中学生と高校生を一つの群としてみなし分析を行った。

### 1. アタッチメント・スタイル尺度の因子分析

アタッチメント・スタイル尺度の18設問の天井－床効果を確認したところ、1設問について床効果が確認されたので、その項目を除いた17設問について主因子法 Promax 回転による3因子指定の因子分析を行った。その結果、次の3因子の下位尺度を得た（表2）。第一因子は、「私はすぐに人と親しくなる方だ」「私は知り合いができやすい方だ」などから「安定型」、第二因子は、「人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある」「ちょっとした

表2 アタッチメント・スタイル尺度の因子分析 (Promax 回転後)

項 目	F 1	F 2	F 3	共通性	
<b>第一因子 安定型 (<math>\alpha = .872</math>)</b>					
1. 私はすぐに人と親しくなる方だ。	.849	-.148	-.102	.660	
2. 私は知り合いが得意やすい方だ。	.842	-.236	-.094	.662	
3. 私は人に好かれやすい方だと思う。	.787	-.268	-.045	.623	
4. 初めて会った人とでもうまくやって行ける自信がある。	.686	-.203	-.102	.538	
5. たいていの人は、私のことを好いてくれると思う。	.662	-.308	-.111	.533	
6. 気軽に頼ったり頼られたりすることができる。	.627	-.214	-.247	.418	
<b>第二因子 アンビバレント型 (<math>\alpha = .798</math>)</b>					
7. 人は本当はいいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。	-.269	.781	.367	.530	
8. ちょっとしたことでも、すぐに自信をなくしてしまう。	-.169	.682	.325	.442	
9. ときどき友だちが、本当は私を好いてくれているのではないかと、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある。	-.192	.675	.243	.426	
10. 自分を信用できないことがある。	-.175	.628	.384	.384	
11. 私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人から嫌がられてしまう。	-.125	.567	.362	.329	
12. あまり自分に自信が持てない方だ。	-.204	.465	.045	.308	
<b>第三因子 回避型 (<math>\alpha = .718</math>)</b>					
13. あまりにも親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう。	-.200	.429	.745	.478	
14. どんなに親しい仲であろうと、あまりなれなれしい態度をとると嫌になってしまう。	-.134	.373	.680	.434	
15. 私は人に頼らなくても、自分ひとりで充分にうまくやって行けると思う。	.015	.116	.567	.270	
16. 人に頼るのは好きではない。	-.100	.235	.525	.276	
	寄与率(%)	29.340	17.466	10.436	57.242
因子間相関	F 1	-			
	F 2	-.300	-		
	F 3	-.145	.447	-	

ことで、すぐに自信をなくしてしまう」などから「アンビバレント型」、第三因子は、「私は人に頼らなくても、自分ひとりで充分にうまくやって行けると思う」「人に頼るのは好きではない」などから「回避型」とし、アタッチメント・スタイル尺度の下位尺度として用いた。

## 2. アタッチメント・スタイルの分類と生活形態の関連

3つのアタッチメント・スタイルのうち、個人の最も活性化しやすいスタイルを特定するために、先のアタッチメント・スタイル尺度の因子分析で算出された因子得点をもとに対象者の個人内比較を行い、その個人の最も高かった得点をその対象者のアタッチメント・スタイル①安定型、②アンビバレント型、③回避型とした。対象者のアタッチメント・スタイルをC群とH群に分け、回答頻度をクロ

ス集計し、 $\chi^2$ 検定および残差分析を行った。

表3は、生活形態とアタッチメント・スタイルの回答分布を示している。C群は、安定型が14.3%、アンビバレント型が45.9%、回避型が39.8%であった。 $\chi^2$ 検定の結果、クロス集計の分布に偏りが認められ、C群とH群にはアタッチメント・スタイルに違いがあることが示された( $\chi^2 = 27.529$   $df = 2$   $p < .01$ )。また、両群ともどこが有意であるかを見るために残差分析を行った。その結果、C群の安定型が少なく、アンビバレント型と回避型はともに多かった。また、H群は安定型が多く、アンビバレント型、回避型がともに少なかった。

表4は、生活形態とアタッチメント・スタイルの男女差の回答分布を示している。 $\chi^2$ 検定の結果、両群とH群のクロス集計の分布に偏りが認められた(両群; $\chi^2 = 14.901$   $df$

表3 生活形態とアタッチメント・スタイルのクロス集計

生活形態		アタッチメント			合計
		安定	アンビバレント	回避	
児童養護	度数	14	45	39	98
	期待度数	35.1	33.1	29.8	98
	調整済み残差	-5.2*	3.0*	2.4*	
家庭	度数	111	73	67	251
	期待度数	89.9	84.9	76.2	251
	調整済み残差	5.2*	-3.0*	-2.4*	
両群	度数	125	118	106	349
	割合	35.8%	33.8%	30.4%	100.0%

$\chi^2$ 検定結果： $\chi^2=27.529$   $df=2$   $p<.01$

残差分析の結果：<sup>n.s.</sup> not significant \* $p<.05$

表4 生活形態とアタッチメント・スタイルの性別ごとのクロス集計

生活形態	性別		アタッチメント			合計
			安定	アンビバレント	回避	
児童養護	<i>m</i>	度数	9	17	20	46
		期待度数	6.6	21.1	18.3	46
		調整済み残差	1.4n.s.	-1.7n.s.	0.7n.s.	
	<i>f</i>	度数	5	28	19	52
		期待度数	7.4	23.9	20.7	52
		調整済み残差	-1.4n.s.	1.7n.s.	-0.7n.s.	
家庭	<i>m</i>	度数	47	24	44	115
		期待度数	50.9	33.4	30.7	115
		調整済み残差	-1.0n.s.	-2.6*	3.8*	
	<i>f</i>	度数	64	49	23	136
		期待度数	60.1	39.6	36.3	136
		調整済み残差	1.0n.s.	2.6*	-3.8*	
両群	<i>m</i>	度数	56	41	64	161
		期待度数	57.7	54.4	48.9	161
		調整済み残差	-0.4n.s.	-3.0*	3.5*	
	<i>f</i>	度数	69	77	42	188
		期待度数	67.3	63.6	57.1	188
		調整済み残差	0.4n.s.	3.0*	-3.5*	

$\chi^2$ 検定結果：児童養護施設  $\chi^2=3.503$   $df=2$  n.s.

家庭  $\chi^2=16.103$   $df=2$   $p<.01$

両群  $\chi^2=14.901$   $df=2$   $p<.01$

残差分析の結果：<sup>n.s.</sup> not significant \* $p<.05$

= 2  $p<.01$ , H群； $\chi^2=16.103$   $df=2$   $p<.01$ ）。C群のクロス集計の分布に偏りが認められなかった（C群； $\chi^2=3.503$   $df=2$  n.s.）。両群とH群の分布のどこに偏りがあるかを確かめるために残差分析を行った。その結果、両群とH群のアンビバレント型は女子が男子に比べて多く、回避型は男子が女子に比べて多かった。

### 3. 特性不安尺度とアタッチメント・スタイルの関連

特性不安尺度は、曾我（1983）による日本版 STAIC の特性不安20項目を分析に用いた。

表5は、特性不安と生活形態とアタッチメント・スタイルの平均値と標準偏差である。表6は、特性不安と生活形態と性別の平均値と標準偏差である。これらの結果の関連を調べるために、生活形態とアタッチメント・スタイルおよび性別を独立変数、特性不安を従

表 5 生活形態, アタッチメント・スタイルごとの特性不安尺度の得点

生活形態	アタッチメント	平均値	標準偏差	度数
児童養護	安定	36.43	6.79	14
	アンビバレント	46.60	7.43	45
	回避	41.46	9.26	39
	全体	43.10	8.83	98
家庭	安定	34.67	7.06	111
	アンビバレント	44.59	7.46	73
	回避	37.13	9.51	67
	全体	38.21	8.92	251
両群	安定	34.86	7.02	125
	アンビバレント	45.36	7.49	118
	回避	38.73	9.61	106
	全体	39.58	9.15	349

表 6 生活形態, アタッチメント・スタイル, 性別ごとの特性不安尺度得点

生活形態	アタッチメント	性別	平均値	標準偏差	度数
児童養護	安定	<i>m</i>	34.22	6.22	9
		<i>f</i>	40.40	6.47	5
	アンビバレント	<i>m</i>	43.18	9.07	17
		<i>f</i>	48.68	5.42	28
	回避	<i>m</i>	38.60	8.95	20
		<i>f</i>	44.47	8.82	19
	全体	<i>m</i>	39.43	9.00	46
		<i>f</i>	46.35	7.35	52
家庭	安定	<i>m</i>	33.55	7.56	47
		<i>f</i>	35.48	6.60	64
	アンビバレント	<i>m</i>	43.54	7.95	24
		<i>f</i>	45.10	7.25	49
	回避	<i>m</i>	35.84	8.92	44
		<i>f</i>	39.61	10.30	23
	全体	<i>m</i>	36.51	8.94	115
		<i>f</i>	39.65	8.68	136
両群	安定	<i>m</i>	33.66	7.31	56
		<i>f</i>	35.84	6.67	69
	アンビバレント	<i>m</i>	43.39	8.32	41
		<i>f</i>	46.40	6.83	77
	回避	<i>m</i>	36.70	8.95	64
		<i>f</i>	41.81	9.85	42
	全体	<i>m</i>	37.35	9.03	161
		<i>f</i>	41.50	8.84	188

表 7 特性不安尺度と生活形態, アタッチメント・スタイル, 性差の検討 (F 値)

	生活形態	アタッチメント	性別	生活形態 ×アタッチメント	多重比較 (Bonferroni 法による) 児童養護施設>家庭 アンビバレント型>回避型>安定型 女子>男子
特性不安	6.595**	32.293**	14.948**	0.695 <sup>n.s.</sup>	

(\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , <sup>n.s.</sup> not significant)

属変数とした 2 要因の分散分析を行った (表 7)。その結果, 生活形態要因での主効果に有意差 ( $F(1, 343) = 6.595, p < .01$ ), ア

タッチメント・スタイル要因での主効果に有意差 ( $F(2, 343) = 32.293, p < .01$ ), 性別要因での主効果に有意差が認められた ( $F$

(1, 92) = 14.948,  $p < .01$ )。これらの交互作用は見られなかった ( $F(2, 343) = 0.695, n.s.$ )。また、これらのどこに差があるのかを調べるために、Bonferroni法による多重比較を行った。その結果、C群はH群よりも特性不安が高かった。また、両群とも安定型よりも回避型、回避型よりもアンビバレント型の特性不安が高く、男子よりも女子の特性不安が高いことが示された。

## IV 考 察

### 1. 児童養護施設の中高校生のアタッチメント・スタイルと特性不安の関連

出野(2008)は、児童養護施設の入所児童のアタッチメント・スタイルと心的外傷性症状の関連について調べ、アンビバレント型の入所児童の心的外傷性症状が高いという結果を得ている。

Warren et al.(1997)によると、青年期の不安障害は、乳児期におけるアンビバレント型のアタッチメント・スタイルに最も結びつく傾向があるという。また、Ogawa et al(1997)は、回避型の乳児は、心理的障害の割合が高い(70%)一方、アンビバレント型の乳児が安定型の乳児とほぼ同じくらいしか、診断のつくような精神病理を呈していないという。

本研究では、アタッチメント・スタイルと生活形態に関連が認められた。すなわち、C群のアタッチメント・スタイルは、H群と比べて、安定型が少なく、アンビバレント型と回避型がともに多かった。この結果から、C群のアタッチメント・スタイルは不安定なものだといえる。

表3、表4は、生活形態とアタッチメント・スタイルの関連について調べたものである。児童養護施設と家庭という生活形態とアタッチメント・スタイル(安定型、アンビバレント型、回避型)との間に有意な差が見られた。

このことからわれわれが立てた「仮説①C群のアタッチメント・スタイルは、H群と比較し、安定型が少なく、アンビバレント型と回避型がともに多いだろう」は支持されたといえる。

表5～7は、特性不安と生活形態とアタッチメント・スタイルの関連を調べたものである。特性不安についてSpielberger et al(1973)は、「不安状態の経験に対する個人の反応傾向を反映するもので、比較的安定した個人の性格傾向を示すもの」と定義している。C群は、H群と比べて、特性不安が高かった。また、アンビバレント型、回避型、安定型の順に特性不安が高かった。このことからわれわれが立てた「仮説②H群と比較し、C群の特性不安は高いだろう。仮説③C群の特性不安は安定型に比較し、アンビバレント型と回避型の方が高いだろう」は支持されたといえる。つまり、C群は、不安が高い状態で生活していることが示唆された。

これらの結果を踏まえ、C群の心理的特性について、アタッチメント・スタイルと特性不安の関連を考察する。

表7からアタッチメント・スタイルと不安の関連が認められた。アタッチメント・スタイルと不安について、両者は全く異なるものではなく、アタッチメント・スタイルと不安は密接に関連していると考えられる。アタッチメント・スタイルと不安の関連には、ストレス状況で不安が高まったとき、日常生活では無意識であるアタッチメント・スタイルが発動されるという心理的循環が生じていることが想定される。例えば、アタッチメント・スタイルが不安定であれば、高まった不安がなかなか低減されず、反対にアタッチメント・スタイルが安定していれば、不安が低減しやすく、すみやかに解消される。

表3からC群の多くは、アタッチメント・スタイルが不安定であることが明らかになった。中高校生は、子どもから大人への過渡期

にあり不安が高まりやすい時期であり、進学、就職や施設から離れるなどの環境の変化により、ストレス耐性の限界を超えてしまいやすいと考えられる。アタッチメント・スタイルが不安定な児童の多くは、ストレスの影響をより受けやすく、上手く適応しづらくなり、メンタルヘルスに問題が現れやすいと考えられる。

「児童養護施設の入所児童は、虐待などの理由で養育者から分離され、専門的なケアを受けながら生活を送っている」(厚生労働省, 2015)。H群にはほとんどないストレスとして、C群は、養育者との別居を余儀なくされるというアタッチメント対象の喪失を経験している。このことがC群の不安を高めたのではないかと考えられる。Robertson (1971) は、「入院時などアタッチメント対象から分離させられる児童は並外れたストレス体験をする」「このことから病院は、入院する児童の母親との滞在を許可するようになった」という。増沢 (2012) によると、社会的養護児童には「一貫しない不安定な養育環境の中で、喪失体験を繰り返してきて」おり、喪失によって生じる不安などを受け止める手立てが不十分であるという。本調査の結果からC群の喪失体験は、児童の不安を高めただけでなく、アタッチメント・スタイルにも影響を与えたのではないかと考えられる。アタッチメント対象の喪失体験が、アタッチメント・スタイルの形成に影響を与え、不安定型が多くなったと考える。

厚生労働省 (2015) の調査では、児童養護施設の入所児童のうち約6割が、被虐待経験がある。C群の多くの児童も虐待を受けていた可能性が高いと思われる。つまり、C群の多くが、不安定なアタッチメント・スタイルであったことから、虐待経験との関連が窺える。Fonagy (2001/2008) は、「虐待を受ける児童にとってアタッチメント対象 (養育者) は安全と危険の両方のシグナルとして存在し

ている。アタッチメント対象が虐待を続けることは、児童のアタッチメント・スタイルを不安定型へ歪めるリスクを高める」としている。また、本調査における対象児童の施設入所時期、理由、経緯は明らかではないが、前述の通り、そのうちの約6割に被虐待経験があるならば、C群の多くはアタッチメント・スタイルが形成される乳幼児期に、一貫しない養育環境の中、怯え、混乱を抱えたまま放置されるなど強い不安や加重なストレスを抱えていたと推察される。本調査では、乳幼児期の虐待経験の有無を尋ねていないので、虐待経験がアタッチメント・スタイルを歪めたと言断することはできないが、C群が乳幼児期に虐待を受けた経験によってアタッチメント・スタイルが不安定型へ歪められたという可能性は十分ありうると考えた。

表6と表7の特性不安得点の男女差では、女子の特性不安が有意に高い結果を示している。曾我ら (1976) は、女子の不安の高さは、多くの研究で実証されていると述べている。したがって、本研究の結果が示した女子の特性不安の高さは、従来の研究結果と一致したものと判断できる。

## 2. 本研究の臨床的意義と課題

Bowlby (1969/1976) (1973/1977) (1980/1981) は、乳児のアタッチメントの安定性が、長期にわたり対人関係、自己理解や心理的障害に影響すると考えている。本研究では、永続的な性格特性である特性不安とアタッチメント・スタイルに関連があるものと仮定し、調査を行った。その結果、われわれが立てた仮説は支持され、児童養護施設の入所児童のアタッチメント・スタイルと特性不安の関連が認められた。

Roy et al (2000) は、「グループ・ホームの児童と里親家庭で育った児童を比較したところ、グループ・ホームの児童の方が注意散漫かつ多動で、養育環境は注意散漫と多動に

影響する」と結論している。

認知面に関して、「回避型では、アタッチメントに関連した思考、感情、記憶が制限されたものになる一方、アンビバレント型では誇張あるいは歪曲される」(Bowlby, 1979)という。

被虐待歴を有する児童の場合、「アタッチメント・スタイルは不安定型が多く、気分のむらがあり、仲間関係が乏しく、抑うつと攻撃性の徴候をより多く示す」(Weinfield et al., 1999)。

以上の研究と今回の結果をもとに、アタッチメント・スタイルに不安定型が多かったことについて、C群のメンタルヘルスに大きな課題があると思われる。児童養護施設の入所児童のメンタルヘルスのためには家庭的な養育環境の確保と養育者との分離によるアタッチメント対象の喪失に対する心理的ケアが必要である。また、近年推進される社会的養護における施設養護の小規模化や里親家庭の支援が、児童のメンタルヘルスに影響を与えるものと思われる。

更に、Freud (1926/2010) が、「不安はすべての神経症的徴候の中心である」というように、C群の多くは、高すぎる不安が、生活の質を低下させていることにつながっていると思われる。C群のメンタルヘルスを向上させるために、不安を低減させる直接処遇におけるケアに加え、心理療法が非常に重要な意味を持つと思われる。

アタッチメント・スタイルは、乳幼児期には注目されやすい。しかし、今回の結果から中高校生のような思春期のメンタルヘルスにおいても有用な概念だといえる。児童養護施設の入所児童のアタッチメント・スタイルの側面のケアも考慮すべきである。

本研究は、年齢ごとの比較が出来ないという問題点があったが、児童養護施設の入所児童のメンタルヘルスを議論する上で、必要な資料となると考えた。児童養護施設の入所児

童の心理の更なる研究を進めるにあたり、アタッチメント・スタイルと生育歴、入所期間や年齢ごとの詳細なデータに基づく検証が必要だろう。

#### 〔付 記〕

本調査に協力してくれた対象者の皆様、児童養護施設ならびに中学校の関係各位に感謝申し上げます。また、本研究に対しご助言、ご示唆を下さったたくさんの方々に敬意を表します。なお、本研究の一部は、北海道心理学会第61回大会（2014年11月30日、札幌）において報告した。

#### 〔引用文献〕

- Bowlby, J. (1969) Attachment and loss. Vol. 1. Attachment. Basic Books, New York. (黒田実郎・大羽葵・岡田洋子訳 (1976). 母子関係の理論Ⅰ：愛着行動. 岩崎学術出版)
- Bowlby, J. (1973) Attachment and loss. Vol. 2. Separation: Anxiety and anger. Basic Books, New York. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳 (1977). 母子関係の理論Ⅱ：分離不安. 岩崎学術出版)
- Bowlby, J. (1979) The making and breaking of affectional bonds. British Journal of Psychiatry. 130; 201-210, 421-431.
- Bowlby, J. (1980) Attachment and loss. Vol. 3. Loss: Sadness and depression. Hogarth Press and Institute of Psychoanalysis, London. (黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳 (1981). 母子関係の理論Ⅲ：愛着喪失. 岩崎学術出版)
- Brisch, K. H. (2002) Treating Attachment Disorders: From Theory to Therapy. The Guilford Press. (数井みゆき・遠藤利彦・北川恵監訳 (2008). アタッチメント障害とその治療—理論から実践へ. 誠信書房)
- Fonagy, P. (2001) Attachment Theory and Psychoanalysis. Other Press, New York. (遠藤利彦・北山修監訳 (2008) 愛着理論と精神分析. 誠信書房)
- Freud, S. (1926) Hemmung, Symptom und

- Angst. 国際精神分析出版社。(大宮勘一郎・加藤敏訳(2010) 制止, 症状, 不安. 加藤敏(編) フロイト全集19; 9-101. 岩波書店)
- 出野美那子(2008) 児童養護施設における青年期前期の子どもの愛着状態と心的外傷性症状. 発達心理学研究, 19(2); 77-86.
- 泉玲・石田弓(2012) 特定の他者ごとに特有な内的作業モデルを想定した愛着スタイルと対人不安の関連の検討. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 11; 55-70.
- Klein, M. (1959) *Autobiography*, unpublished. Wellcome Trust. Bronstein, C. (Ed) (2001) *Kleinian Theory: A Contemporary Perspective*. Whurr Publishers, London: (福本修・平井正三監訳, 小野泉・阿比野宏・子どもの心理療法セミナー in 岐阜訳(2005). 現代クライン派入門—基本概念の臨床的理解—. 岩崎学術出版社)
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局(2015) 平成27年1月児童養護施設入所児童等調査結果. <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000071187.html> (Retrieved 2016.3.3)
- 牧田浩一(2006) 児童養護施設における心理療法事業の組織化の試み—徳島県における実践を通して—. 遊戯療法学研究, 5(1); 52-60.
- 増沢高(2012) 虐待を受けた子どもの喪失感と絶望感. こころの科学, 162; 41-45.
- 西村洋一(2008) 対人不安とアタッチメント・スタイルとの関連についての検討. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 1; 261-274.
- Ogawa, J., Sroufe, L. A., Weinfield, N. S., et al. (1997) Development and the fragmented self. Longitudinal study of dissociative symptomatology in a nonclinical sample. *Development and psychopathology*, 9; 855-879.
- 奥山真紀子・宮本信也・中島彩, 他(2000) 被虐待児の精神症状の特徴 愛着を含む他者関係および自己制御の問題を中心として. 平成12年度厚生科学研究報告書. 子ども家庭総合研究所; 426-446.
- 大井京子(2004) 内的作業モデルと不安・抑うつとの関連. 東京家政大学 臨床相談センター紀要, 4; 17-29.
- Robertson, J. (1971). *Young children in brief separation - A fresh look*. *Psychoanalytic Study of the child*. 26, 264-315.
- Roy, P. R., Rutter, M., Pickles, A. (2000) Institutional care risk from family background or pattern of rearing?. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 41; 139-149.
- 曾我祥子・吉田恒子・古賀愛人, 他(1976) 特性不安と場面不安の関係について. 兵庫医科大学誌, 5(1); 170-174.
- 曾我祥子(1983). 日本版 STAIC 標準化の研究. *心理学研究*, 54; 215-221.
- Spielberger, C. D., Edward, C. D., Lushene, R. E., et al. (1973) *STAIC Preliminary manual for the state-trait anxiety inventory for children*. Consulting Psychological Press, California.
- 詫摩武俊・戸田弘二(1988) 愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度の試み—. 東京都立大学人文学報, 194; 1-16.
- 戸田弘二(1988) 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル—作業仮説(Working Models)からの検討. 日本心理学会第52回大会発表論集.
- 戸田弘二(1991) *Internal Working Models 研究の展望*. 北海道大学教育学部紀要, 55; 133-143.
- Warren, S. L., Huston, L., Egeland, B., et al. (1997) Child and adolescent anxiety disorders early attachment. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 36; 637-644.
- Weinfield, N. S., Sroufe, L. A., Egeland, B. et al. (1999) The nature of individual differences in infant-caregiver attachment. Cassidy, J. & Shaver, P. R. (eds) *In Handbook of Attachment: Theory, Research and Clinical Applications*; 68-88, Guilford, New York.